植草学園大学研究紀要　第14巻　5～15頁（2022）

B.Edu.Health Sci.UG Univ. vol.14, 5-16, 2022

原　著

大学生のボランティア活動における職業観が進路選択に対する自己効力と友人との葛藤解決効力感に及ぼす影響

金子　功一[1]，栗原　ひとみ[1]

[1] 植草学園大学発達教育学部

本研究では，大学生158名（男性：37名；女性：121名）を対象に，ボランティア活動や地域への関心，職業観，自己効力感等に関するオンライン調査を行った。研究Ⅰでは，ボランティア活動への参加，学生の住んでいる地域や大学周辺地域への関心について調査した。その結果，学生は地域への関心は低いものの，大学が地域と連携する必要性を感じていることが示された。研究Ⅱでは，ボランティア活動における職業観が進路選択に対する自己効力と友人との葛藤解決効力感に及ぼす影響過程について検討した。その結果，職業観の「やりがい」や「経済的安定」は，進路選択に対する自己効力を媒介し，友人との葛藤解決効力感に有意な正の影響を及ぼしていた。また，職業観の「人間関係」は，直接，友人との葛藤解決効力感に有意な正の影響を及ぼしていた。職業選択において，良好な人間関係を求めることは，友人との葛藤を適切に解決できる効力感につながることが示された。

キーワード：ボランティア活動，職業観，進路選択，自己効力，友人との葛藤解決効力感

1．はじめに

高等教育機関（大学）が，地域社会の課題解決に取り組むなどの積極的な役割を果たすことが求められている（文部科学省，2020）。また，大学教育の役割として，学生の多様なニーズに見合った支援体制の構築とともに，キャリア形成を促進するための包括的な取り組みを推進していくことが必要である。

文部科学省（2018）では，高等学校における就業体験等を通じて望ましい勤労観や職業観の育成，職業人に求められる倫理観に関する指導を積極的に行っていくことが推進されている。大学においては，学生のキャリア形成を見据えて，ボランティア関連科目の設置，インターンシップを含めた自主的なボランティア活動の単位認定など，学生が活動しやすい教育環境の整備が行われている。こうした取り組みを通じて，学生はボランティア活動から多様な学びを得ることが可能となる。例えば，保育教諭を目指すなら幼稚園や保育所，認定こども園の活動に参加したり，小学校教諭や特別支援教諭を目指すなら障害児施設や学習支援ボランティアとして地域の小学校と連携したりすることが指摘されている（廣澤・大西・笹原 他，2021）。北川・三瓶・福井 他（2000）は，看護職を目指す学生が糖尿病の子どもを対象としたサマーキャンプに参加することによって，役割の理解や責任感，子ども理解，子どもと学生との相互作用過程を向上させる，という教育効果が得られたことを示している。また，寺田（2008）は，介護職を目指す学生が高齢者福祉施設での活動を通じて，主体性や積極性が促され，そこで出会った施設利用者や職員との人間関係を通して身につけた自信が就業意識の向上に繋がったことを示唆している。このように学生の目指す職業と関連するボランティア活動に参加することは，学生の資質や能力，就業意識を高めることに良い影響を及ぼす可能性があると考えられる。ただし，先行研究では，ボランティア参加者の心の変容に着目した研究はあるものの，ボランティア活動を行った後，学生の就業意識にどのような効果があったかを示した研究は管見の限り見当たらない。今後，大学における学生へのキャリア支援体制を構築するためには，ボランティア活動と就業

意識との関連性を明らかにする必要がある。高橋（2005）は，ボランティア活動が働くことの価値観を意味する「職業観」を予測する可能性を示唆している。そこで本研究では，ボランティア活動後の就業意識として「職業観」を用いる。

現代社会は，職業やライフコースの多様化，雇用の流動化，ワークライフバランスの進展などによって就業構造が大きく変化しており，大学生はこれまで以上に主体的なキャリア開発が必要になっている（川瀬，2016）。大学在学中に将来の進路や自分自身のキャリア形成について真剣に考え，自らの進路を選択・決定し，その進路に適応していくことが求められる。しかし，自らの進路を選択・決定し，その進路に適応していくことは容易なことではない。そのため学生は，在学中にボランティア活動を行い，自らの進路選択・決定に対する自信，すなわち自己効力（self-efficacy）を高める必要がある。

自己効力とは，ある行動が自分にうまくできるかどうかという期待の認知である。Bandura（1977）は，この期待の認知について，ある行動によって結果を出せるかどうかという「結果期待（outcome expectancy）」とその行動を遂行可能かという「効力期待（efficacy expectancy）」に区別し，後者の効力期待を「自己効力」と呼んだ。また，Talor & Betz（1983）は，Bandura（1977）の自己効力理論を進路選択行動に応用し，「進路選択自己効力」という概念を提唱した。浦上（1995）は，進路選択に対する自己効力が高い人は進路選択行動を活発的に行い，より努力するため，その行動は効果的になると指摘している。さらに，金城（2008）は，アルバイトやサークルなどの学内外で活発に活動している学生は自己効力が高いことを示唆している。したがって，こうした研究知見からボランティア活動における「職業観」が進路選択に対する自己効力にどのような影響を及ぼすかについて検討する。

ボランティア活動は純粋に利他的なものに限らず，大学での単位取得のためという外発的な理由で参加する場合もある。これはボランティア活動の目的が「援助者から受益者へ」という一方向的な関係ではなく，「人と人の支え合い」という双方向な関係を背景にもつことが指摘されている（伊多波・首藤，2016）。妹尾（2008）は，ボランティア活動を経験する過程を通じて，援助効果や社会的効果（人間関係の広がり）がボランティア活動継続の動機づけをより高めることを示唆している。また，伊佐（2016）は，短期海外研修プログラムに参加した学生の中で，海外ボランティア研修の参加者は，語学研修の参加者よりも，自信感や人間関係構築力が高いことを示している。さらに，海外ボランティア研修では，人間関係の失敗や挫折もあるが，交流・交渉を経験し，関係の維持・構築がなされる過程を通じて「人間関係構築力」が養われると推察している。ボランティア活動に参加した場面では，新たな友人と関係性を構築する必要があり，新たな友人との間に価値観の違い（葛藤）が生じる可能性も推測される。ただ，こうした友人との葛藤場面では，自己効力感が重要な影響を及ぼすと考える。そこで本研究では，ボランティア活動における友人との関係性を捉える指標として「友人との葛藤解決効力感」を用いる。

そして本研究では，小学校教諭や特別支援教諭，保育者を目指す学生を対象としたオンライン調査を実施し，ボランティア活動への参加経験とその種類，参加経験の中で一番印象に残っている出来事の記述等を含む調査を行うことも目的とする。

以上のことから本研究では，大学生を対象に，研究Ⅰではボランティア活動への参加経験や地域への関心，一番印象に残っている出来事等について調査する。研究Ⅱでは，ボランティア活動における職業観が進路選択に対する自己効力と友人との葛藤解決効力感に及ぼす影響性を検討し，教員・保育者養成校におけるボランティア活動の意義，及び大学が地域連携を推進していく取り組みについて考察する。

2．研究Ⅰ

2-1．目的

研究Ⅰでは，大学生を対象に，ボランティア活動への参加や地域への関心等に関する調査を行う。

2-2．方法

1）調査時期と方法

2021年1月から2月に，Googleフォームによるオンライン調査を実施した。

2）調査対象者

A大学の学生164名（男性：39名；女性：125名）。

3）倫理的配慮

オンラインによる講義終了後，本調査では，①授業の成績には関係がないこと，②無記名および統計的に処理されるため個人が特定されないこと，③調査の参加は自由意志であること，④調査結果は研究発表や論文誌に掲載される可能性があることを口頭で説明後，Googleフォーム冒頭文にも記述した。

4）調査内容

(1) あなたは自分の住んでいる地域の取り組みについて関心がありますか。（①関心がない～④とても関心がある，の4段階で回答）

(2) あなたはA大学周辺地域や地域の取り組みについて関心がありますか。（①関心がない～④とても関心がある，の4段階で回答）

(3) A大学に入学後，ボランティアの参加経験（1つ以上）はありますか。（①ある，②なし，で回答）

(4) (3)「ある」と回答した方へ質問します。今まで，どのようなボランティアに参加しましたか？（具体的な記述で回答）

(5) (4) で記入したボランティアの中で，一番印象に残っているものは，次のカテゴリーの中でどれに当てはまりますか。（①地域イベント・行事，②学校・保育所・幼稚園などの行事，③障害児・者福祉施設の行事，④公共施設の行事，⑤その他，で回答）

(6) (5)で選択したボランティアで，一番印象に残っている体験は，どのようなことでしたか。（具体的な記述で回答）

(7) A大学が周辺地域や地域の人々と連携していくことは必要だと思いますか。（①全く必要だと思わない～④非常に必要だと思う，の4段階で回答）

2-3. 結果と考察

(1) 自分の住んでいる地域の取り組みへの関心は，①関心がない1名（1%），②あまり関心がない67名（43%），③関心がある77名（50%），④とても関心がある9名（6%），と回答し，①②の関心がない68名（44%）と③④の関心がある86名（56%）で，関心がある学生の方が多かった。

(2) A大学周辺地域や地域の取り組みへの関心は，①関心がない6名（4%），②あまり関心がない96名（58%），③関心がある56名（34%），④とても関心がある6名（4%），と回答し，①②の関心がない102名（62%）と③④の関心がある62名（38%）で，関心がない学生の方が多かった。

(3) A大学に入学後，ボランティアの参加経験（1つ以上）はありますか，という質問では，164名中158名（96%）があると回答した。

(4) (3)「ある」と回答した学生の具体的なボランティア参加先について，331の記述数（複数回答あり）が得られた（表1）。記述数の選定では，学生のボランティア先の名称を1つずつ集計した後，カテゴリー毎に分類した。

(5) (4) で記入したボランティア活動の中で，一番印象に残っているカテゴリーについて，②学校・保育所・幼稚園などの行事48名（30%），③障害児・者福祉施設の行事33名（21%），①地域イベント・行事34名（21%），④公共施設の行事4名（3%），⑤その他39名（25%），の順で多かった。

(6) (5)で選択したボランティアで，一番印象に残っている体験に関する具体的な記述が得られた（表2）。

(7) A大学が周辺地域や地域の人々と連携していくことの必要性について，①必要だと思わない0名（0%），②あまり必要だと思わない6名（4%），③必要だと思う102名（62%），④非常に必要だと思う55名（34%），と回答し，①②の必要だと思わない6名（4%）に対し，③④の必要だと思う157名（96%）で，ほとんどの学生が，大学が地域と連携していく必要性を感じていることが示された。

以上より研究Ⅰでは，自分の住んでいる地域や大学周辺地域の取り組みへの関心は低いものの，地域連携の必要性を感じていることが明らかとなった。また，学生は様々なボランティア体験を通して多様な学びを経験していることが示された。研究Ⅱでは，大学のボランティア活動の影響に着目し，ボランティア活動における職業観が進路選択に対する自己効力や友人との葛藤解決効力感に及ぼす影響性について検討する。

表１　ボランティア先のカテゴリー分類に関する頻出語順（*N*=331）

順位	語	頻度	順位	語	頻度
1	障害者福祉施設	48	11	公共施設でのボランティア	8
2	地域イベントスタッフ	47	12	こどものまち	7
3	保育補助ボランティア	44	13	被災地・復興ボランティア	7
4	小学生との関わり・夏合宿	28	14	アートフレンズ展	5
5	子ども食堂	26	15	ボッチャ大会	4
6	パラスポーツイベントスタッフ	24	16	農園でのボランティア	4
7	特別支援学校・療育センター	22	17	水泳大会	3
8	教職たまごプロジェクト（授業補助・学習支援）	16	18	小学生陸上クラブ	3
9	放課後デイサービス	15	19	YMCA	2
10	地域でのゴミ拾い	10	20	その他	8

表２　ボランティア先におけるカテゴリー毎の「一番印象に残っている経験」に関する記述例

カテゴリー	記述例
障害者福祉施設	・障害のある女の子と一緒にお祭りを回ったことです。暑い中元気よく走り回っていたので追いかけるのが大変でしたが一番良い経験をしたので印象深いです。 ・障害者施設で、1日一緒に生活すると、どんなことにつまずくのか、どんな生活をしているのかがよくわかりました。職員の方の苦労も聞くことができて、障がいのある人との接し方を学びました。
地域イベントスタッフ	・子どもたちや利用者の方と関わりながら、イベントの運営サポートをしたり、参加者の活動をサポートする体験。
保育補助ボランティア	・子どもが会う回数を重ねるごとに、信頼関係が築かれていることを感じた。 ・子どもが自分の名前を覚えてくれて、遊びに誘ってくれた。
小学生との関わり・夏合宿	・町中を子どもたちと歩いていろんなお店や場所を散策するボランティア活動。 ・キャンプのボランティア。何回も事前指導や会議に参加して、スケジュール組むのがすごく大変だったけど、同じ学生ボランティアや地元の小学生と関わりがあり、とても楽しかった。
子ども食堂	・1年生のボランティアの大半は子ども食堂で行いました。多くの子どもたちと関わることができ、非常に良い経験をできたと思います。皆で公園で遊んだり、ご飯を食べたり、トランプなどで遊んだりと沢山の思い出があります。
パラスポーツイベントスタッフ	・パラスポーツフェスタというパラスポーツについて体験出来る機会でそのサポートをしました。健常者の方だけでなく障害のある方まで参加し、空き時間にはパラスポーツを体験できました。パラスポーツの楽しさやもっと注目して欲しいなという気持ちを抱いたことをとても印象に残っています。
特別支援学校・療育センター	・障害のある子ども達と関われたことや学校現場の雰囲気を知れたことが印象に残った。・利用者の方々とクリスマスプレゼント渡したり一緒にクリスマス会を盛り上げたりして楽しんで過ごせた。様々な方々と交流深めることのできる良い機会となった。
教職たまごプロジェクト（授業補助・学習支援）	・外国の児童への学習支援に参加した。また、自閉症スペクトラム障害の子どもを支援するため、小学校生活を1日体験しました。 ・小学校の学習支援ボランティアで、子ども達とたくさん遊んだり話したりして関わった。
放課後デイサービス	・老人ホームでのお祭りの補助で、射的屋さんやヨーヨー釣り等のお店で利用者さんととても楽しく関わることができた。
地域でのゴミ拾い	・台風の後、町のゴミ拾いに参加した際、地域の方々が一丸となって町をきれいにしようと頑張っていました。 ・海辺のゴミ拾いのボランティアが1番印象的で、アイスブレイクをしてから参加者の方々とワンチームになってゴミ拾いをしました。
公共施設でのボランティア	・美術館でのワークショップで、実際に子どもを目の前に一緒に作品を製作した際、子どもへの言葉かけ方や安全に配慮した対応、子どもの考えを尊重することを意識した対応について身をもって学ぶことができた。
わかばCBTこどものまち	・子ども達が主体的に町づくりをしていく中で、小学1年生から中学生までがそれぞれ力を合わせて町に必要な施設や店を運営し、実際、仮想通貨を使いやり取りをしていく中で、大人は見守るだけでも、子ども達は自分の意見を伝え合う力が育つことが印象に残っています。 ・子ども達とダンボールで看板づくりをするなどで身の回りにある材料を使って、町づくりをした。
被災地・復興ボランティア	・知的障害のある方々の施設で、ミニ運動会を企画し、運営した。 ・自分達で考えた催し物で利用者さんが笑顔になってくれた。
その他	・小学生と一緒に3泊4日のキャンプ。日が経つにつれて子ども同士のトラブルが頻繁に起こり、その対処を行う過程で色々な関わり方を実践的に学べたのが印象的でした。

3．研究Ⅱ

3-1. 目的

研究Ⅱでは，ボランティア活動後の影響に着目し，ボランティア活動における職業観が進路選択に対する自己効力や友人との葛藤解決効力感に及ぼす影響性について検討する。

3-2. 方法

1）調査期間

研究Ⅰを参照。

2）分析対象者

A大学に入学後，ボランティアに参加したと回答した大学生158名（男性：37名；女性：121名 *M*=20.43歳（*SD*=.82））を分析対象とした。学年の内訳は1年生：2名，2年生：86名，3年生：57名，4年生：13名であった。

3）倫理的配慮

研究Ⅰを参照。

4）尺度構成

① 職業観

職業観尺度（松並・萩野，2015）を用いた。この尺度は，「人間関係」，「やりがい」，「経済的安定」，「プライベート重視」，「男女平等の環境」の計22項目（資料①）。教示文は「あなたは将来の仕事について、どのように考えていますか」とした。

② 進路選択に対する自己効力

進路選択に対する自己効力尺度（短縮版）（浦上・脇田，2016）（以下：進路選択自己効力）の計10項目（資料②）。教示文は「あなたはどのように考えて（思って）いますか」とした。

③ 友人との葛藤解決効力感

友人との葛藤解決効力感尺度（金子・中谷，2014）（以下：葛藤解決効力感）の計6項目（資料③）。教示文は「あなたの友人とのつきあい方についてお尋ねします」とした。

各尺度の評定は，①は「1. 全くあてはまらない～5. かなりあてはまる」5件法，②は「1. 全く自信がない～4. 非常に自信がある」4件法，③は「1. 全くあてはまらない～4. 非常にあてはまる」5件法であった。

なお，分析では，JASP（0.14.1.0）とIBM SPSS Amos 26を用いた。

3-3. 結果と考察

1）記述統計と信頼性係数

各尺度の記述統計について，平均値（*Mean*）と標準偏差（*SD*）を求めた（表3）。また，各尺度の信頼性係数（ω係数）を算出したところ，全ての尺度で.70以上であったことから各尺度の内的一貫性に問題がないと判断した。分析では，尺度得点が高いほど大きくなるように加算した後，それを項目数で割り，得られた平均評定値を尺度得点とした。

2）相関分析

職業観の各下位尺度と進路選択自己効力，及び葛藤解決効力感の各要因におけるピアソンの相関係数を算出したところ，職業観の「人間関係」は進路選択自己効力（r=.34），葛藤解決効力感（.26）とそれぞれ有意な相関（p<.001）を示した（表3）。また，「やりがい」は葛藤解決効力感（.29），「経済的安定」は進路選択自己効力（.36）とそれぞれ有意な相関（p<.001）を示した。さらに，「男女平等の環境」は進路選択自己効力（.29），葛藤解決効力感（.29）とそれぞれ有意な正の相関（p<.001）を示した。なお，進路選択自己効力と葛藤解決効力感との間には，有意な正の相関（.47：p<.001）が示された。一方，「やりがい」と進路選択自己効力，「経済的安定」と葛藤解決効力感，「プライベート重視」と進路選択自己効力，葛藤解決効力感との間には有意な差は見られなかった。

3）男女差と学年差

各尺度間に男女差（t検定）と学年差（分散分析）があるかを検定した結果，有意な差は見られなかった。

4）パス解析

職業観の各下位尺度が，進路選択自己効力や葛藤解決効力感に及ぼす影響過程について，構造方程式モデリングによるパス解析を行った（図1）。パス上に示した数値は標準化係数で，有意な影響が見られたパスのみを示した。モデル内の変数間の関係は，前の段階の変数すべてが次の段階の変数に影響するパスを予め仮定した上で，5％水準で有意性の見られなかったパスを削除しながら分析を行った。

これらの結果，最終的なモデルの適合度指標は，$\chi^2(3)$ =3.67(.299)，GFI=.991，AGFI=.955，

TLI=.987，CFI=.996，RMSEA=.037であり，十分な適合度を示していた（図1）。分析の結果，職業観の「やりがい（β=.26；p<.001）」と「経済的安定（.28；p<.001）」は，進路選択自己効力（.43；p<.001）を介して，葛藤解決効力感を促進させていた。また，「人間関係（.20；p<.001）」は，直接，葛藤解決効力感を促進させることが示された。

5）進路選択自己効力と葛藤解決効力感の関係に関する職業観下位尺度の媒介効果（間接効果）の検討

職業観の「やりがい」と「経済的安定」の間接効果（specific indirect effect）について正確に評価を行うため，ブートストラップ法を用いて95%信頼区間（CI）を算出した。ブートストラップ法は比較的小さいサンプルにおける変数の非正規性の問題を回避する上で有効な手法であり（Baron & Kenny, 1986），近年，数多くの研究によってその有効性が実証されている（Williams & Mackinnon, 2008；畑野, 2013）。表4より，職業観の「やりがい」が.112（95% CI:.040～212），「経済的安定」が.119（95% CI:.037～.233）でそれぞれ有意であることが示された。こうした結果から，職業観の「やりがい」と「経済的安定」が葛藤解決効力感に間接的な影響を及ぼしていることが明らかとなった。

表3　職業観と自己効力感に関する指標の記述統計とω係数，相関分析結果（N=158）

	$M(SD)$	ω係数	1	2	3	4	5	6
1 人間関係	4.06(.59)	.73	—					
2 やりがい	4.15(.60)	.84	.59***	—				
3 経済的安定	4.05(.58)	.80	.27***	.33***	—			
4 プライベート重視	3.53(.59)	.70	.12	.01	.53***	—		
5 男女平等の環境	4.24(.67)	.80	.41***	.29	.51***	.31***	—	
6 進路選択に対する自己効力	2.66(.56)	.92	.34***	.19	.36***	.14	.29***	—
7 友人との葛藤解決効力感	2.56(.45)	.73	.26***	.29***	.13	.01	.29***	.47***

***p<.001

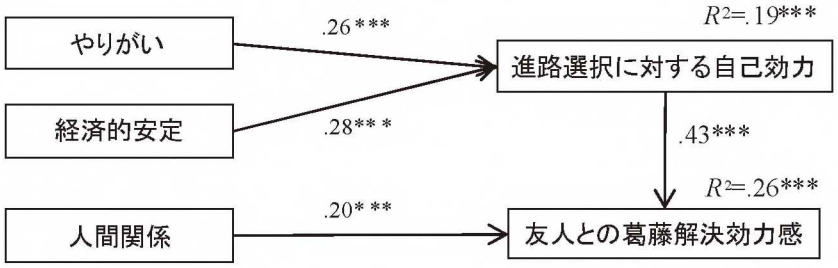

図1　ボランティアにおける職業観が進路選択に対する自己効力と葛藤解決効力感に及ぼす影響過程

表4　友人との葛藤解決効力感への間接効果検定（ブートストラップ法）の結果

	間接効果	SE	p	95%信頼区間	
				下限	上限
やりがい	.112	.043	.002	.040	.212
経済的安定	.119	.048	.001	.037	.233

4．総合考察

1）研究Ⅰ：ボランティア活動に関する実態調査

今回の調査では，学生は自分の住んでいる地域や大学周辺地域の取り組みへの関心は低いものの，大学が地域と連携していく必要性を感じていることが明らかとなった。また学生は，様々なボランティア体験を通して多様な学びを経験していることが示された。本学のように，教員・保育者養成校では，教員免許や資格取得を目指す学生には，ボランティア科目の単位取得を課していることが大きな要因であると考えられる。さらに，大学内において，ボランティアの募集を積極的に行っていることも影響していると推測される。

実際に参加した学生が多かったボランティア活動は①「障害者福祉施設」，②「地域イベントスタッフ」，③「保育補助ボランティア」であり，いずれも現在の学びや将来のキャリア形成を踏まえ，学生自身にとってプラスとなるようなボランティア活動に積極的に参加している様子が伺われた。

2）研究Ⅱ：ボランティア活動における職業観が進路選択自己効力や葛藤解決効力感に及ぼす影響性について

(1) 相関分析結果

職業観の「人間関係」は進路選択自己効力と葛藤解決効力感，「やりがい」は葛藤解決効力感，「経済的安定」は進路選択自己効力とそれぞれ有意な関係を示した。また，「男女平等の環境」は進路選択自己効力と葛藤解決効力感とそれぞれ有意な関係を示した。一方，「やりがい」と進路選択自己効力，「経済的安定」と葛藤解決効力感，「プライベート重視」と進路選択自己効力，葛藤解決効力感との間には有意な関係は見られなかった。こうした結果は，職場において，人間関係を重視し，仕事へのやりがいや男女平等な職場環境を求めることは将来の職業選択だけでなく，友人との葛藤を解決できるという効力感も高める可能性が示されたと考える。一方，経済的な安定を求めたり，プライベートを大切にしたりするだけでは，自己効力感の向上にはつながらない可能性が示唆されたと考えられる。

(2) パス解析結果

職業観の「やりがい」と「経済的安定」が進路選択自己効力を介して，葛藤解決効力感に及ぼす影響過程が明らかとなった。また，職業観の「人間関係」は，直接，葛藤解決効力感を促進させていることが示された。さらに，ブートストラップ法による間接効果を検証した結果，職業観の「やりがい」と「経済的安定」が葛藤解決効力感に間接的な影響を及ぼしていることが明らかとなった。

伊多波・首藤（2016）は，ボランティア活動に参加した学生の中でも活動内容に満足しているかどうかによって，ボランティア活動に継続して参加するという効力感を高める可能性を示唆している。その上で，ボランティア活動自体が楽しみながら成長を感じられる内容であること，人との繋がりや広がりを感じられることが，総じて活動への満足感も高めると推察している。職業観の「やりがい」から進路選択自己効力や葛藤解決効力感への影響過程の背景には，学生自身がボランティア活動自体にやりがいを感じることが，自己効力感の向上につながった可能性が推察できる。さらに，伊藤（2011）は，個人がボランティア活動を行う動機には，ボランティア活動によって自分の価値観や主義を表出する「利他的動機」と現実的な報酬をボランティア活動から得ようとする「利己的動機」があることを指摘している。特に後者の「利己的動機」は，ボランティア活動が新しい経験や知識，技術の習得を可能にするとする「知識機能」や新しい仕事のチャンスを与えてくれるとする「経歴機能」があることを示唆している。そして，ボランティア活動に関心がある友人との関係を緊密にするという「社会適応機能」が，社会的な報酬を得ようとする動機と対応していることを示している。こうした先行研究の知見を踏まえると，職業観の「経済的安定」から進路選択自己効力や葛藤解決効力感への影響過程の背景には，学生自身がボランティア活動を通じて，利己的動機を高め，社会適応機能を得たいという動機が関連していると推察できる。ただし，ボランティア活動の動機における利己的動機と利他的動機は明確に区分することはできず，個人がボランティア活動を行う上では，その両方の動機を同時に保持していると指摘されている（伊藤，2011）。そのため，本研究で示された結果の解釈には慎重さが求められる。

3）地域連携を推進していく取り組み

大学が担っていく役割を考える上で重要な点が，“地域の活性化”である（池田・小早川・中尾，2016）。大学の役割が教育と研究だけでなく，地域社会への貢献であることが，近年特に重視されている（文部科学省，2020）。こうした役割において，大学が学生のボランティア活動を積極的に推進することは，“地域の活性化”を促すことが期待できる。このようなボランティア活動の積極的な推進を通して，地域とのつながりを緊密にしていくことは，大学が地域に対する「気づき」を促し，また地域が大学に対する役割を再認識していくことにもつながる可能性が示唆される。図２のモデルは，大学の地域連携室が橋渡しとなり，学内機関（学友会，ピア・サポーター，学部・学科，教員，ゼミ）と学外機関（自治体・行政機関，自治会等・地域コミュニティ，企業・NPO 法人）とがともに地域連携を推進していく方向性を示している。大学内だけでなく，大学と地域とが「つながる」ことで，それぞれがもつ知識やアイデアを生かしたり、地域の課題を解決したりするための包括的な取り組みを推進することが可能となると考える。

５．今後の課題

今回の調査では，調査項目中には将来希望する卒業後の進路を回答する質問項目がなかった。したがって，学生の進路選択において，小学校教諭や特別支援教諭，保育者を目指す学生以外も含まれていた可能性が考えられる。また，職業観，進路選択自己効力，葛藤解決効力感への影響過程が示されたが，なぜその影響過程が見いだされたかという因果関係の解明までには至らなかった。各要因間における因果関係が生じた原因を詳細に検討することによって，適切な進路を選択し，職業を決定していく行動がスムーズにできない学生に対する支援や指導的介入における留意点を明らかにすることができると考えられる。今後はこうした問題点を踏まえた研究の発展が必要であると考える。

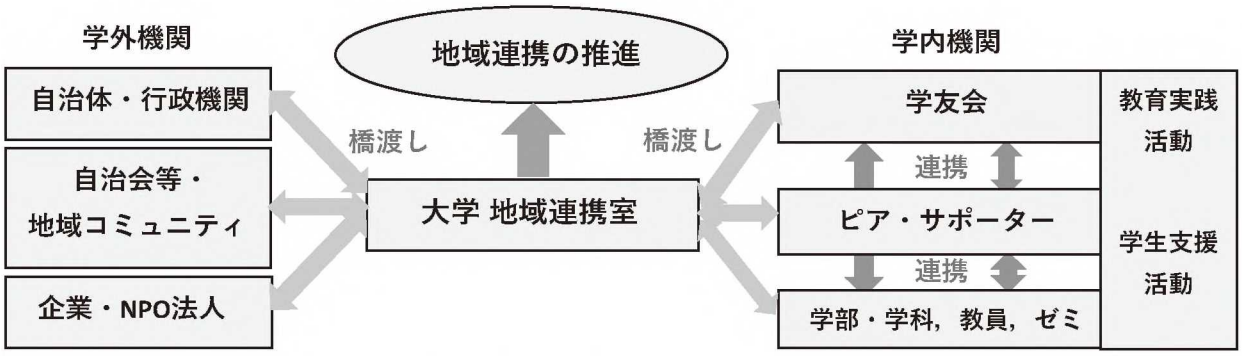

図２　大学における地域連携の推進モデル

付記

本研究は令和２年度植草学園大学学内共同研究助成を受けて行われました。本研究の調査にご協力下さいました学生の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

Baron, R.M. & Kenny, D. A. (1986). The moderator mediator variable distinction in social psychological research: conceptual strategic, and statistical considerations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1173-1182.

Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.

畑野　快（2013）．大学生の内発的動機づけが自己調整学習方略を媒介して主体的な学習態度に及ぼす影響　日本教育工学会論文誌，**37**，81-84.

廣澤愛子・大西将史・笹原未来　他（2021）．大学生による学校支援ボランティアにおいて児童生徒に肯定的な変化が見られた事例の特徴　教育心理学研究，**69**，

187-203.

池田幸代・小早川睦貴・中尾　宏（2016）．大学の地域連携による学生教育の取り組み：地域資源を活用した商品開発プロジェクト　東京情報大学研究論集，**20**(1)，1-13.

伊佐雅子（2016）．大学生の短期海外研修の効果：学生の自信感形成要因の観点から　沖縄キリスト教学院大学論集，**12**，36-49.

伊多波美奈・首藤敏元（2016）．大学生におけるボランティア経験とボランティア活動に期待する成果、自己効力感、及び協調性との関連　埼玉大学紀要．教育学部，**65**(2)，35-46.

伊藤忠弘（2011）．ボランティア活動の動機の検討　学習院大学文学部研究年報，**58**，35-55.

金子功一・中谷素之（2014）．青年期の友人関係が適応に及ぼす影響について：友人に対する価値観と葛藤解決効力感に着目して　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要，**61**，95-103.

北川かおる・三瓶まり・福井典子・南前恵子・前田隆子・笠置綱清（2000）．ボランティア体験が学生にもたらす教育効果（Ⅱ）鳥取大学医療技術短期大学紀要，**32**，35-40.

金城　光（2008）．進路選択に対する自己効力と職業不決断・実際の進路決定行動との関連：大学4年生を対象とした性差からの検討　キャリア教育研究，**27**，15-23.

松並知子・萩野佳代子（2015）．女子大学生のキャリアプランと「自立」の関連：心理的・社会的・経済的側面を含めて　神戸女学院大学論集，**62**(2)，121-136.

文部科学省（2018）．キャリア教育の推進（国立教育政策研究所）https://www.mext.go.jp/apollon/mod/pdf/mext_propulsion_20180223.pdf（2021年10月11日 確認）

文部科学省（2020）．私立大学等改革総合支援事業　タイプ3地域社会への貢献（プラットフォーム型）に対応できる体制の構築 https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/07021403/002/002/1340519.htm（2021年10月11日確認）

妹尾香織（2008）．若者におけるボランティア活動とその経験効果　花園大学社会福祉学部研究紀要，**16**，35-42.

高橋美保（2005）．「働くこと」の意識についての研究の流れと今後の展望　東京大学大学院教育学研究科紀要，**45**，149-157.

Taylor, K. M., & Betz, N. E. (1983). Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of vocational Behavior*, **22**, 63-81.

寺田節子（2008）．ボランティア活動が及ぼす教育効果の実際：学生の主訴を中心に　中国学園紀要，**7**，95-99.

浦上昌則（1995）．女子短期大学生の進路選択に対する自己効力と職業不決断：Tayor & Betz（1983）の追試的検討 進路指導研究，**16**，40-45.

浦上昌則・脇田貴文（2016）．項目反応理論を用いた進路選択に対する自己効力尺度短縮化の試み 南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編，**12**，67-76.

Williams, J. & Mackinnon, D. P. (2008). Resampling and distribution of the product methods for testing indirect effects in complex models. *Structural Equation Modeling*, **15**, 23-51.

資　料

資料①：職業観尺度（松並・萩野，2015）の項目内容

1）人間関係
　仕事を通じて自分らしさを発揮する
　人々とのつながりを実感するような仕事をする
　仕事上で人とのつながりを実感する
　人との出会いが多い職場で働く
　職場で周囲の人々との信頼関係を築く
2）やりがい
　仕事を通して社会へ貢献する
　社会の一員として仕事にたずさわる
　仕事でみとめられるようになる
　社会のためになる仕事をする
3）経済的安定
　労働条件のよい仕事をする
　雇用が安定している大きな組織で働く
　経営が安定している職場で働く
　経済的安定のために働く
　給料がよい仕事をする
4）プライベート重視
　プライベートに支障がでない働き方をする
　報われない仕事はしない
　辛い仕事はなるべく避ける
　重要な責任を負う仕事はしない
　家族や友人と一緒に過ごせる時間が多くとれる働き方をする
5）男女平等の環境
　性別による差別がない仕事をする
　昇進や研修の機会が男女平等である職場で働く
　性別に関わりなく活躍できる職場で働く

資料②：進路選択に対する自己効力尺度（浦上・脇田，2016）の項目内容

自分が従事したい職業（職種）の仕事内容を知ること
自分の望むライフスタイルにあった職業を探すこと
就職したい産業分野が，先行き不安定であるとわかった場合，それに対処すること
将来のために，在学中にやっておくべきことの計画を立てること
自分の才能を，最も活かせると思う職業的分野を決めること
現在考えているいくつかの職業のなかから，一つの職業に絞り込むこと
自分の将来設計にあった職業を探すこと
将来どのような生活をしたいか，はっきりさせること
自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと
望んでいた職業が，自分の考えていたものと異なっていた場合，もう一度検討し直すこと

資料③：友人との葛藤解決効力感尺度（金子・中谷，2014）の項目内容

友人と言い争いしても仲直りする方法を知っている
友人に裏切られたと思ったときは、自分の気持ちを素直に話して理解してもらうことができる
友人と意見が一致しなかった時は、お互いが納得するような見解を見つけることができる
友人関係の中で、友人との適切な距離の取り方がわかっている
友人に誤解された時、なぜ誤解されたかわからないことがある*
友人に誤解された時は、丁寧に説明して誤解を解くことができる

*は逆転項目を示す

B.Edu.Health Sci.UG Univ. vol.14, 5-15, 2022

Original Article

Abstract

The effect of college students' view toward occupation in volunteer activities on self-efficacy, career choices, and effectiveness of conflict resolution with friends

Koichi KANEKO, Hitomi KURIHARA
Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

In this study, we conducted an online survey of 158 College students (male: 37; female: 121) regarding volunteer activities, interest in the community, occupational views, and self-efficacy. In Study I, we investigated participation in volunteer activities and interest in the area where students live and the area around the College. The results showed that students were less interested in the community but felt the need for universities to collaborate with the community. In Study II, we examined the process of influence that occupational views in volunteer activities have on self-efficacy for career choices and the effectiveness of resolving conflicts with friends. Results showed that occupational views of "rewarding" and "economic stability" mediated self-efficacy for career choices and had a significant positive effect on the effectiveness of conflict resolution with friends. In addition, the occupational view of "human relations" had a significant positive effect on the effectiveness of resolving conflicts with friends. It was shown that seeking good relationships in career selection leads to the effectiveness of appropriately resolving conflicts with friends.

Keywords: volunteer activities, vocational views, self-efficacy, career choices, conflict resolution with friends